

白居易と岩垣龍溪の「代売薪女贈諸妓」詩

丹羽博之

要旨

白居易は長慶三（八二三）年、杭州刺史の時、次の詩を詠じている。

代売薪女贈諸妓 薪を売る女に代はりて諸妓に贈る

乱蓬らんぼう為鬢布ふ為巾 乱蓬らんぼうを鬢と為し 布ふを巾と為し

曉踏寒山自負薪 曉に寒山を踏み 自ら薪を負ふ

一種錢塘江畔女 一種せんとう錢塘 江畔の女

著紅騎馬是何人 紅を著 馬に騎る 是れ何人ぞなにびと

〔白氏文集〕卷二〇・一三八二

一方、江戸の詩人岩垣龍溪（一七四一〜一八〇八）にも同題の詩がある。

日夜章台生春色 日夜章台 春色生じ

嬌娥きょうが応咲売薪声 嬌娥きょうがに咲わらふべし 薪を売うるの声

白居易と岩垣龍溪の「代売薪女贈諸妓」詩

蓬頭時折山花挿 蓬頭 時に山花を折りて挿む

不羨珠簪向客傾 羨まず 珠簪客に向つて傾くるを

一読、白詩を模倣したのは明らかであろう。白詩は、妓女への戯れに主眼があるのに対して、岩垣龍溪の詩は、薪を売る女の心意気を詠んでおり、貧者への同情が読み取れるように思う。両詩の比較を通して、江戸時代の白詩受容の一斑を述べたい。また、岩垣龍溪と同時代の詩僧六如の「題大原女」詩は両者の詩を参考にして作ったことを考察する。

キーワード：白居易、白氏文集、岩垣龍溪、六如、大原女

一 代売薪女贈諸妓詩

白居易は長慶三(八二三)年、五二才、杭州刺史の時、次の詩を詠じている。

代売薪女贈諸妓 薪を売る女に代はりて諸妓に贈る

乱蓬為鬢布為巾 乱蓬を鬢と為し 布を巾と為し

曉踏寒山自負薪 曉に寒山を踏み 自ら薪を負ふ

一種錢塘江畔女 一種錢塘 江畔の女

著紅騎馬是何人 紅を著 馬に騎る 是れ何人ぞ

(那波本『白氏文集』卷二〇・一三八二)

前半は「売炭翁」の「曉駕炭車輾水轍」とよく似た表現である。

一方、江戸の詩人岩垣龍溪（一七四一～一八〇八）にも同題の詩がある。

日夜章台生春色 日夜章台 春色生じ

嬌娥応笑売薪声 嬌娥きょうが応に咲わらふべし 薪を売るの声

蓬頭時折山花挿 蓬頭ほうとう 時に山花を折りて挿む

不羨殊簪向客傾 羨うらやままず 殊簪しゅせん客に向つて傾くるを

一読、白詩を模倣したのは明らかであろう。「乱蓬」と「蓬頭」「負薪」と「売薪」等が類似している。次に岩垣龍溪の略歴を挙げる。

一七四一～一八〇八。江戸時代、京都の人。（略）宮崎筠圃に学び、また皆川淇園に学んだ。人となり篤厚謹信。経学は古学を奉じた。著に論語集解標記十卷（略）松蘿館詩鈔一卷・松蘿館文集一卷・松蘿館隨筆（略）がある。（『日本漢文学大辞典』明治書院）

岩垣龍溪の詩は、前半で妓女の華麗な暮らしぶりを述べ、結句において堅気女の心意気を述べる。白詩は貧女を詩の前半において述べ、結句で妓女に問いかけている。白詩は、妓女への戯れに主眼があるのに対して、岩垣龍溪の詩は、薪を売る女の心意気を詠んでおり、貧者への同情が読み取れるように思う。また、貧富、階級差への矛盾もわずかに読み取れるのではないか。江戸漢詩に於いては、白詩の受容は「長恨歌」などの有名な作品だけではなく、このような無名の小品にも受容が広まっていたことを窺わせる。

「誰々に代わって、誰々に答える」の先例としては、崔顥（？～七五四）の「代閨人答輕薄少年」（『全唐詩』卷一三〇）等がある。この詩は、軽薄な男に嫁いだ女性の悲劇を女性に代わって詠んだもの。こうした「女性に代わって詩を贈る」の詩の系譜の上に白詩は詠まれたのであろう。

二 六如の題大原女詩

岩垣龍溪と同時代の六如上人(一七三七〜一八〇二)の詩にも山村で働く女性と花街の女性の対比を詠った詩がある。その詩とは、

題大原女

戴新去換数升陳 薪を戴きて去きて換ふ 数升の陳

髻髻行滕青布巾 髻髻 行滕 青布巾

怪見城中倡家婦 怪しみ見る 城中倡家の婦

金花庄首是何人 金花 首を庄するは是れ何人ぞ

(『六如庵詩鈔』遺編卷中)

【語釈】〔陳〕は古米。〔髻髻〕はひつつめ髪。〔行滕〕は脚絆(きゃはん)〔青布巾〕は青の手甲。

〔大原女〕は、京都北郊の大原や八瀬から黒木や炭などを頭にのせ、京都の町へ売りに来る女。もめんがすりに手甲脚絆(てっこうきゃはん)の独特な風俗が有名。

というもの。六如は慈周とも名乗ったが、『日本漢文学大辞典』の「慈周」の項には、以下のようにある。

一七三七〜一八〇一。江戸時代、近江(滋賀県)の人。詩僧。名は慈周。字は六如。(略)彦根の野村東皐について詩文を学んだ。初め比叡山東麓善光院に住み、(略)のち江戸に出て宮瀬龍門に従って修辞を学んだが、その非を悟り、当時流行の偽唐詩を嫌って宋詩を唱え、専ら陸放翁を学んで詩風革新の先駆者となった。(略)晩年は京都真葛原の恵恩院に閑居し、また愛宕山白雲教寺に住んだ。(略)著に真葛原詩話四卷・同後編四卷・六如庵詩鈔六卷がある。

岩垣龍溪と六如の二人は、同時代の人で共に京都に住んでいたので、交流もあったであろう。

六如の詩は、白詩とは結句において「著紅騎馬是何人」「金花庄首是何人」と極めて類似する。初めの四字で、妓女の華やかさを述べ、「是何人」と結んでいる。白詩の起句「布為巾」と六如の承句「青布巾」も類似しており、両詩とも「巾」「人」で韻を踏んでいる。

更に結句は共に「是何人」と結んでいる。結句は、白居易も「著紅騎馬」と妓女を描写し、六如も「金花庄首」と表現し、最初四字は、妓女の贅沢な暮らしぶりを詠み、「是何人」と結んでおり、全く同じ句作りをしている。これは、絶句の最後で、白詩の利用であることとの種明かしをしているようにも思える。

「是何人」を台湾の東呉中文研究所の「寒泉」で検索すると、三十例ある。そのうち、白居易の例が八例と飛び抜けて多く、次は李頰の三例、李白の二例である。白樂天の八例中、七言絶句は「代売薪女贈諸妓」詩を含めて三例であるが、全て結句の句末は「是何人」である。他の二例を挙げる。

哭従弟（『白氏文集』卷一六・九七四）

傷心一尉便終身 叔母年高新婦貧 一片綠衫消不得 腰金拖紫是何人

憶江柳（『白氏文集』卷一八・一二〇四）

曾栽楊柳江南岸 一別江南兩度春 遙憶青青江岸上 不知攀折是何人

こうした例から、「是何人」を結句末に持つてくる詠み方は白樂天が好んだことがうかがわれる。これらのことから、六如は白詩を利用したことは明らかであろう。

岩垣の詩は詩題が同じ分、詩の構成において、前半に諸妓を描写し、後半で薪を売る女性を持つてくるという変化を持たせている。六如の詩は、詩題は全く別であるが、同じ韻を使っており、原詩の白詩により近い内容になっている。おそらく、六如は岩垣の詩を読み、白詩の利用と気づき、「薪を売る」から大原女を連想し、祇園か島原か上七軒あたりの女性を思い浮かべて作詩したのではないだ

ろうか。六如は近江に生まれ、比叡山北谷善光院に住んだこともあるので、大原女の風俗のこともよく知っていたであろう。白詩では騎馬の女性が詠まれ、六如詩では「鬢髻行藤青布巾」と日本の風俗が詠まれており、日中の風俗の相違が詠まれている。

六如は岩垣龍溪の詩題を見て、白詩の模倣だと気づき、詩題をそっくり借りるといふ岩垣龍溪の詩作りに共感するとともに、六如はもう一ひねりしたのであろう。詩題を純日本的な「大原女」に置き換え、その風俗を和語「行藤」「青布巾」を用いて詠うが、韻は白詩に揃え、結句の句作りと末尾三字を同じにすることで、種明かしをし、白詩の換骨奪胎であることを最後に示したのではないか？こうした、さりげなく白詩の利用であることを末尾で示す方が詩としては高度な印象を受ける。しかし、よほどしっかり白詩を読み込んでいないと、また、「代売薪女贈諸妓」が白詩に基づくことを知らない、六如の詩の意図は読み取れない。今回の発表が縁で江戸漢詩をいろいろと読み進めるうちに六如の詩に出会い、その奥底に白詩の利用があることに気づいた。

追補・幕末の詩人、金本相観（一八二九年生、没年不詳）の詩に「鬢薪婦」の五絶がある。その詩は、

戴薪曉入城 薪を戴いて 曉城に入り

日暮半未鬢 日暮 半ば未だ鬢がず

雪埋四明巔 雪は埋む 四明の巔

家住四明麓 家は住む 四明の麓

というもので、薪を売る女性の苦勞を詠う所に共通点がある。

*本稿は二〇一〇年九月、和漢比較文学会 第三回特別研究発表会（台湾大学）において口頭発表したものに追加・補筆したものである。席上多くの方からご意見を戴いた。記して御礼申し上げます。